



コーサンビー城跡からの出土品。
二頭の動物を従えている

城壁跡からヤナム河を見下ろす



人身御供の場所を示す鷲のマーク



釈尊の足跡、仏跡は主に北部インド、ガンジス河沿に広がる。八大仏跡に入らないコーサンビー城遺跡は、釈尊が夏の安居(長雨の期間、同じ場所に留まること)を九回行った仏跡である。ベナレスの上流、ガンジス河とヤナム河の合流地点に近い水運に便利な地点にある。コーサンビーの起源は古く紀元前2000年にはできた大きな都市群の一つであった。ヴェーダ時代には既に存在し、後にはヴァツサ王国の首都となった。釈尊が滞在したところはウダヤナ王朝の支配下にあり、仏典には多くの人々がこの地を訪れたことが記されている。そして、紀元前3世紀のマウルヤ王朝、5世紀のグプタ王朝でも重要な都市、特に東西貿易の拠点として栄えた。

そして、コーサンビー城の遺跡には注目すべき遺跡が四か所ある。巨大な城壁、鷲のマークで表される人身御供(ブルシヤメーダ)の跡(鷲のマークで示される)、ゴースータ精舎な



コーサンビー城跡と案内看板



ど三つの精舎、アショーカ王造立の石柱である。城壁はヤムナ川に面し非常に高く、その急な傾斜で水害や敵の侵入を防いでいた。

この城壁や構築物を守るために、狭い空間に生きたままの人間を閉じ込める人身御供が行われた。人見御供を出した家族は膨大なお札を受け取った。アラハバード大学の博物館に保存されているレンガは今でもリンが燃えている証拠に薄い光を放っている。

三精舎にはそれぞれ寄進した人々の名前がつけられている。クツクタ、ゴースータ、ヴァリカでいずれも有力な市民だった。

アショカ王が建立した石柱の石頭はすでにないが、石柱にはコーサンビーで起きた戒律解釈の顛末が彫られている。

釈尊滅後にコーサンビー仏典結集と呼ばれる集会も行われた。その二度目に、一部の比丘たちが手洗いの水を水鉢に残し、物議を醸し出した。水鉢にボウフラがわき蚊となり、

アショーカ王遺立の石柱と筆者。十数年前の記念写真



佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に「ブツダガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。

マラリアを感染させ人命を奪うからである。水鉢に水を残すことは一部の戒律には許されていると正当性を主張する比丘たちと、許されないと反対する比丘たちと二つに分かれた。水を残しても良いと主張した比丘は最終的に破門されたが、コーサンビーの信者による仲介で和解した。釈尊による仲介説もある。このコーサンビー遺跡は1949年からアラハバード大学のシャルマ教授によって数回にわたって調査された。その結果、大きな煉瓦の城壁は紀元前11世紀から紀元前9世紀にわたって造られたことが炭素測定法（木材に残る炭素の放射能量で木材の年代がわかる）で確認されている。また、宮殿あとに残る建物は紀元前8世紀から建てられていることが分かった。宮殿中央にはホールがあり、支配者の住居があった。宮殿内の建物はレンガや石を用いて建てられ漆喰で固められる丁寧な作りだった。